



阿山先生

あし先生指書



あくびしなんしょ指南書

定価九八〇円

一九八一年三月三十日 印刷
一九八一年四月十五日 発行

著者 阿川 弘之

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

あくび指南書

目

次

粗忽の使者 9

子別れ 15

三人旅 21

鉄 拐 27

唐茄子屋政談 33

転失氣 39

碁どろ 45

高砂や 52

三軒長屋 57

小言幸兵衛 62

浦島屋 67

愛宕山 73

一目あがり 78

源平 83

蕎麦の殿様 88

おせつ徳三郎 95

嘘つき弥次郎 102

壺算用 107

千早振る 113

子ほめ 118

厩火事 123

掛取万歳 128

松山鏡 134

紀州 144

寿限無 151

九段目 156

富久 163

はてなの茶碗 169

お見立て 174

お化け長屋 181

島めぐり 187

王子の狐 193

鰻の幫間 198

蒟蒻問答 204

素人鰻 215

妾馬 226

饅頭こわい 232

たちね 238

猫災 244

野ざらし 251

意地くらべ 256

雛鰯 262

締込み 268

疝気の虫 274

松竹梅 279

二階ぞめき 285

五人回し 291

カバ―画・挿画 日暮修一

装幀 大泉 拓

題字 橘 右近

あくび指南書

粗忽の使者

恐怖は感染するが痛みは感染しない。人の痛いのなら三年でも我慢出来る。

「大丈夫だよ、君。人間、歯痛で死にやしませんよ」

痛い痛いという大袈裟に騒ぐな、痛けりや早く歯医者へ行けばいいじゃないかと思っている。

——それが、一旦自分のこととなったら片時も我慢出来ない。

「痛い痛い、痛い」

「イタイイタイ、いたいいたいいたい」

何がさほどに痛いかというと、尾籠ながらお尻が痛い。

三十余年前、落し紙にも不自由していた敗戦直後、この病に取りつかれ、一度、注射だけで治すと称する怪しげな医者にかかって手術（？）を受けたが、日ならずして再発した。

「お前、馬鹿だ」

と、同じ引揚者の兄に言われた。

「手術なんかするから再発する。俺も長年の痔^じ持ちだが、医者には見せん。手術もせん。したがって再発しない」

以来、家兄の教えに従って医者いしやの門を叩かず、だましましたてこんちにちに至っている。兄は十年前心臓の発作で急逝し、しもの宿痾しものしやうこと永別した。私の場合も、長くてあと二十年か二十五年ごまかしつづけていれば、大概こいつと縁切れになるだろう。

ただ、そこまでの道程において、時々木曾の御岳さんみたいたことが起るのが困る。これから新しい仕事にかかろうという時、尻の噴火が始ってまことに困惑している。

「痛い痛いイタイイタイ」

妻子は別室で安らかに睡眠中。何たる無慈悲無神経な家族かと恨めしい気がするけれど、起してみたところで痛みが和らぐわけではない。

広津和郎さんは我慢づよい人であった。晩年痛風を患い、間歇的に激しい痛みがおそうのを、「痛い」と口にすれば尚つらいから、痛いの代りに「プップクプのプ」と唱えることにしていると話しておられた。

それを真似て、

「プップクプ、プップクプ」

顔をしかめながら、

「ああ、プップクプ、ああッ、プップクプのプ」

言ってみても、痛いものはやっぱり痛い。耐えがたく痛い。「起きてみつ寝てみつ尻の痛さかな」、こう痛くてはついに降参して病院行きかな。観念しかけるが、

「いや」

と、また思い返す。

「一定の時間が経てばおさまって来るのは、経験で分っている。戦死した同期生の末期の苦しみに較べたら、何だ、これしきのことが」

軍歌を歌おう。大きな声で海軍の軍歌を歌ってやろう。

「弾の碎片の飛び散りて

数多の傷を身に負えど」

その玉の緒を勇気もてつなぎとめたる水兵は、「痛い」などと決して言わなかったはずだが、ああ、ブップクブ、ブップクブ。

軍歌を歌ってもひびく。本も読めず眠れもせず、一夜あけて未だ痛い。飯を食っても痛い。なるべく馬鹿々々しいことを考える。童謡のパロディーを思いつく。

「ジンジンジラジラお尻が痛む」

はた目にいくら馬鹿々々しくても、本人は真剣である。

「ジンジンジラジラお尻が痛む

ジンジンジラジラ痔が痛む」

こういうのを色々作って気をまぎらそうとしているところへ、風来坊の金やんがあらわれた。ノートのぞいて、

「きたないですなあ」

と言う。

「何ですか、今度の連載は痔の話を書かれるですか」

痔の話なぞ書くつもりはない。説明しておこうと思うのだが、痛くて急には話せない。

「昔、吉原に廊下とんびという者がいたそうだが、君は文壇とんびみたいな男だね」

「そうですか」

「そうですかじゃないよ。人が病気で寝ていようとウンウン苦しんでいようと、構わずふらッとやって来て、今度は何を書かれるですか、どこの連載ですか、痔の話ですか」

「しかし、文士の日常、公私にわたって一応承知しておらんと商売上まずいですからね。タイトルから拝察するに、落語ですか？『あくび指南』はたしか、古典落語の題名にあったでしょう」

「だから、今それを説明します。池波正太郎さんが……」

「池波さんがどうしました？」

「どうもしないけど、僕は池波正太郎氏のあとを承けてこの連載を始めることになったんだ。『日曜日の万年筆』と題する池波さんの連載随筆、終りの方読んでみると、やはりずいぶん苦しんでいる」

「痔ですか」

「痔じゃない。毎週一回八枚のエッセイを長期にわたって書きつづけるのが如何に苦しいかということ、綿々と訴えてたな」

人の痛いのは三年でも我慢出来る。メ切が迫って書くことが無くて、池波正太郎がいくら苦しんでいようと、何とも感じない。だけどそれが、引きつづき我が身にふりかかって来るとなると話は別で、

恐怖が感染し、

「厄介な仕事を引き受けたんじゃないかと末恐ろしくて、気が滅入ってるんだよ。そこでだね」と、私はつづけた。

「自分のあれになって恐縮ですが、三年ばかり前、僕は論語の章句を踏まえて、思いつくままその日その日のつれづれ随想を書いたことがある」

「知ってます」

「論語を茶化したわけではなかったけれど、論語の解説書でもむろんなかった。登場人物は町田の家さんとか上野毛の隠居とか、本屋の赤門堂、万峯楼の若旦那——、変人奇人の友人たちです。それから鬼のおくび、風来坊の金やん、すなわち君。これも新聞界出版界における変人奇人」

「読みましたがネ、おかげで迷惑したですよ」

「黙って聞きなさい。痛いのを我慢して説明してるんだから。つまりね、再び随筆の連載とあれば、どうせこういう連中に登場してもらうことになる。それならいっそ、若旦那や隠居や大家さんにふさわしく、題名も小見出しも、僕の好きな古典落語の中から頂戴してはどうだろう」

「なるほど」

「『粗忽の使者』の主人公は、釘抜きで尻をつねられて、あまりの痛さに使者の口上を思い出す。正確にいえば、口上を聞いて来なかったことを思い出すんだが、毎週落語の題を一つにらみながら、書くことを何か思いつこうというのが僕の心づもりだ。分ったかい」

「ははあ。尻をつねられてネ。何だか話の辻褄が合いすぎてるけど、まあいいです。分かりました。し

かし、最初からそう悲鳴を上げてちやしょうがないなあ」

金やんは言い、

「とにかくお大事に。やっぱりそりゃ、医者に見せにゃいかんですよ」と言い置いて帰って行った。